絶対可憐チルドレン転生物　　練習作

そうめん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
絶対可憐チルドレン転生物　練習作

【Ｎコード】
Ｎ９０１０Ｚ

【作者名】
そうめん

【あらすじ】
初めての投稿作品です
もしも皆本光一に双子の弟がいたら？弟が能力者で転生者だったら？
平日の暇な時間に更新します。亀更新になったらごめんなさい

プロローグ？（前書き）

初投稿作です。よろしくお願いします

プロローグ？

「正ちゃん」
図書館の読書スペースで本を読んでいる時に
皆本　正一は、名前を呼ばれた。
振り返らなくても名前を呼んだ相手はわかっている。
正一を「正ちゃん」なんて呼ぶのは今のところ家族しか居ない。
声の幼さを聞けば思いつくのは一人しか居ない
いつの間にか横に並んで座っている　皆本　光一　を見る。
眼鏡を除けばそっくりな光一、鏡でも見てる気分になるほどそっくりだ。
双子だから当然だと言えば当然かも知れない
最初の頃は違和感があったが八年も一緒だと、これが普通だと思えるようになる
「正ちゃん、お母さんがそろそろ帰ろうって・・・」
光一の話を聞きながら背後から腕が伸びてきて抱きつかれる
「二人共借りる本は決まったかしら？そろそろ帰るわよ」
お母さんが笑顔で話してくるが目が笑っていない
やばい　機嫌が悪いようだ
借りるなら本は一人三冊までと言われどれを借りるか悩んでいる間にいつの間にか読書に夢中になってしまい「まだ決まってません」とはさすがに言える雰囲気では無い
目の前のテーブルに置いてある十冊程の本の中から適当に三冊を選びお母さんに渡す
「お母さん借りない本はあった場所に戻すからちょっと待ってて」
急いで残りの本をあった場所に戻しに行く
八歳の子供には本一冊が重く大きいが何度か往復する事で全部元の場所に戻して、ほっと一息をつき
横に居る光一の顔を見る

「ごめんね。正ちゃん言うのが遅くて・・・」
私は慌てて大きく首を横に振り
「本に夢中になった僕が悪いんだから、お兄ちゃんは気にしなくていいよ」
光一は「うん」と頷きながら、本当に？と尋ねるように私の顔をのぞきこんだ
私は、受付で本を借りているお母さんの後姿を見つめて黙っていた
光一に対して怒っているわけではなかった
『昔の私』が小さい時に夢見た家族象を思い出し、今の私が過ごしている今がその家族像だと気づき今が幸せのように感じた
しかし、『昔の私』を光一にむかって言葉にする気はない
誰に対しても『昔の私』のことを言葉にして語りたいとは思わない
だから口をとじ黙って、お母さんの後姿を見ていた

第一話？（前書き）

こっちがプロローグぽいような・・・

第一話？

私、　杉本　晴香　３９歳　独身
恋人の存在や、結婚の予定は無し
高校を卒業して中小企業の事務職に運良く就職し仕事一筋で働き続け
気がつけば社内でお局様と影で言われ、新入社員の教育担当にもな
っている
新入社員が入社してきて間もないこの時期は、新人教育と自分が受
け持つ仕事の処理などで毎日が忙しく風邪を引いても休むこともで
きそうに無い
いたって普通の一般人だったと思う

気づいたらこの世界に生まれ、赤ん坊になっていた。
最初はパニックになり、起きようと思っても起きれない。
声を出しても「おぎゃぁぁ～～」しか言えない
手足をバタバタさせていたら、人が近づいてくるのを感じ
見ようと目を開けたけど何か膜でもかかってるのか？
ぼんやりとしか目で見ることができない何人か私の前にやってきた
家族でも友人とも違う聞き覚えの無い声を聞き
またパニックになったけど、一人が私の体を触ってなにやら話し合
っていた。
やっとの思い出聞き取れた会話の内容からして
超未熟児が生まれてある程度の体重になるまで命が危ないらしい
何だか、ドキュメンタリーや昼ドラみたいな話だな、と感じながら
私は再び眠りました

会話を聞いてから数日後自分の体の中に【何か？】を感じた
その【何か？】は今の自分にとっては当たり前のもので『昔の私』
にとっては知らないものだった

ただその【何か？】が無ければ自分は死んでしまうと本能ではわかっていた
『昔の私』にとっては、【何か？】に凄く違和感を感じた
その時の私は、その違和感を無視することができず、少しだけ【何か？】を抑えることにした
押さえ込んだ瞬間息苦しさと体中からか伝わってくる痛み
周囲からいくつもの機械音が一斉に高く鳴り響く
近くに人が集まり騒がしく緊迫した感じで飛び交う声
誰かが私に触っり何かを当てたと思った瞬間に電気の衝撃
驚いた私は【何か？】を抑えることを止めた
鳴り響いていた機械音が静まり
すると近くに集まった人達の安堵する声を聞けばイヤでも理解できた
会話の赤ん坊は私だったのだと・・・・

けれど自分がどこにいるのかよくわからなかった
周囲から聞こえてくる会話が日本語だから最初は日本だと思っていた
当時自分がが一番気にしていたのは『元の私がどうなったのか？』だった
生きてるのか？死んでるのか？。多分死んでるだろうが
風邪をこじらせて死んだのか？なんて考えたり
自分の死因がわからなかったのが非常に気持ち悪かった

一ヵ月後、目がある程度見えるようになると
日本だと思っていたのに色とりどりのカラフルな頭髪の人達見て
ここは『昔の私』が知っている世界じゃないと最初に理解した

ここはどこなんだろうと悩んだが、
自分が「絶対可憐チルドレン」の世界に転生したってわかったのは、
三歳くらいだと覚えている
自分の中にある【何か？】が超能力だと言うものに気づき

双子の兄の名前が光一で、定期検査のＥＳＰ検査
ＥＳＰ検査をする機関の名前がＢＡＢＥＬとくれば漫画を読んだことがある人なら解ると思う

将来起こるノーマルとエスパーの争いを思うとため息が出る
原作者の他の漫画を思い出して、最後はハッピーエンド？だから大丈夫だろうと気持ちを切り替えて生きていく事にした
ただ何でＴＳ転生してしまったんだろう？と思うがくよくよしていても仕方ない

第一話？（後書き）

書き足りない文章が多すぎだぁ・・・

第二話？

皆本正一

晩御飯を食べ終えてリビングで図書館から借りてきた本をソファーに座って読んでいた
視線を感じる
借りてきた本から視線を横にずらすと横に光一が居た

「正ちゃん凄いね！そんな難しい本が読めるなんて！」
「そんなに難しくないよ？超能力とＤＮＡがどのように関係するのか？って内容の本だし、お兄ちゃんが読んでる本の方が難しいと思うけど・・・・」
「簡単だよ？量子力学についての内容が書かれてるだけだし」
「・・・・それ高校か大学で学ぶ物だよ」

私は読んでいた本を閉じて、光一の横に移動して読んでいる本を覗いた
エネルギー公式の数式が開かれたページ一杯に書かれている

普通の大人でも、この公式を理解するには専門の知識か最低でも大学の知識が必要になるくらいに難しいと思うんだけど
かるく数式見ただけだから確信できないけど、相対論を考えた数式かな？
原作で光一が小学生の時に特別教育プログラムを進められる理由が理解できそうだ

光一と双子だけあって、この体の暗記力には驚かされたものだ
一度読んだら一文字も間違えずに覚えていて内容も理解してしまう

まるでゲームでもしているような感覚で知識が蓄えられていくのだ
『昔の私』の記憶で期末テストや受験などで苦戦しながらも一生懸命に勉強していたのが良い思い出だ
今は逆に知らないことを知るのが楽しくなっている
気がつけば沢山の知識を蓄えてしまった
ちょっと調子に乗りすぎたのかもしれない

皆本　光一

正一は僕の読んでいる本を見た後、僕の顔を見て難しい顔をしている
世話好きで優しい性格だけど無表情なので初対面の人によく勘違いされる
普段無表情で泣きも笑いもほとんどしない僕の弟
お母さん達が心配して一度病院で相談した事もあるらしい

僕の借りてきた本はそんなに難しかったのだろうか？
弟が顔に表情を出すなんて珍しい

「そんなに難しいかな？」
「・・・・難しいと思う」
「どこかわからない所あるの？教えるよ？」

僕が言うと、正一は目をキラキラ輝かせた
本を数ページ捲り、一つの項目のところを指差して

「お兄ちゃん、ここ教えて欲しいんだけど・・・・」

困った様な顔をしながら正一は僕に聞いてくる

今日の正一は表情がよく変わる
本当に珍しい
正面の少し先に目をやると、お母さんとおばあちゃんがカメラを持って何やら騒いでいる
あれで正一を撮るつもりなのかな？
困った顔をした正一の顔は記念写真になるかも知れない
だけど、カメラで撮られていると知られたら無表情に戻るだろうから気づかれないように、こっちに気を向かせないと責任重大だな・・・

◇　◇　◇　◇　◇　◇

お父さん

「おーとうーさーん」

「どうした？」と言いながらお母さんに呼ばれて見えるところまで来るとソファーの上で正一が寝ていた

「お父さん、正ちゃんが寝ちゃったから部屋まで運んでくれないかしら？」
「それは良いが？珍しいな？正一がこんな所で寝るなんて」
「更に珍しいことに、今日は正ちゃんの表情をカメラに収めたわよ」
「それは凄い記念写真になるな」
「正ちゃんを部屋まで運んでくれた後で見せますよ」
「それは楽しみだ」と言いながら正一を抱き上げた
正一の部屋へ先導する光一の後ろを正一を抱きながら歩いている

正一の顔を見ると穏やかな顔をして寝ている、抱き上げて少し前抱いたときより重くなった息子
ここまで無事に大きく育っていることに嬉しさを感じる

体のさまざまな部分が未発達だったために生まれてすぐに新生児特定集中治療室（ＮＩＣＵ）に運ばれ
私が仕事場から駆けつけたときには正一だけは集中治療室に居るので見ることしかできず
妻と一緒に初めて触り抱いたのが数日過ぎてからだった
妻と光一が退院した後、正一が退院できたのは更に一年後だった

普段は無表情だがただ生きていてくれることだけで嬉しい
退院するときに担当医から合併症の心配を示唆されたが
今は元気に育っていってくれる事がこんなに嬉しい事かと改めて思う

「お父さん？」
「あぁ・・すまんすまん」

光一が不思議そうな顔をして私の顔を見てくる

考え事をしながら歩いていたら、正一のベットの前に居た
正一をベットに寝かせながら、お母さんが後で記念写真を見せてくれると言ってたな
記念写真がどんな表情で写っているのか楽しみだ

第二話？（後書き）

感情を文章にするって難しいですね

第三話？

皆本　正一

いつも通りに学校に行って、いつも通りに今日も私は友達の家に来ています

「こら！真面目にジャガイモの皮を剥け！」

調味料が入った小瓶が目の前にいる青い頭髪をした少年の頭に当たる
小気味よいコンという音が聞こえた
少年は痛かったのか？目を少し潤わせながら私の顔を睨む

「いてぇ～～！ちゃんと皮剥いてるじゃねぇか！」
「芽もちゃんと取れと何度言えばわかるんだよー」
「だから！ちゃんと剥いてるだろうが！！芽なんてあっても煮て食えばたいして変わらないじゃないか！！！」
「口答えするな！」

今度は近くにあったラップが浮いて少年に目掛けて飛んでいく
ゴンとさっきよりも重い音が聞こえた

「っ～～～～～～～！！！！！！」

さっきよりも痛かったのだろう
今度は両手で当たった箇所に手を当てて半泣きしている

「手を休めるなよ！早く料理作ってお前の勉強も見るんだから」
「今日も勉強かよ！！」

「はいはい、わかったから手を動かせ」

「なんでこうなった？」等と友達の　吉田　実　がブツブツ呟きながら言われたとおりにジャガイモの皮を剥いている

☆　☆　☆三ヶ月前☆　☆　☆

吉田　実

ここは何かを建設する予定だったのか放置された工事現場だ
人気は無いが僕はここを秘密基地に使っている
今僕の前では学校で無表情が理由で鉄化面とあだ名で呼ばれている
同じクラスの　皆本　正一　がいる
向こうは僕には気づいていないようだ
工事で使う予定だった機材や道具を見ている

何をしているんだろう？

僕は不思議に思いながら黙ってみていた
すると突然正一の前にあった工事車両の一台が浮き始めた
驚いて僕は気づかないうちに声を絞り出していた

「ひぃ！！」

正一は僕の声に気づいたんだと思う
こちらに顔を向けて目が合った
僕はすぐに逃げようと思い立とうとしたら腰が抜けたのか立てなくなっていた
視線の先では正一が僕に向かって歩いてくる
一歩一歩僕に近づいてくる
腰を抜かして動けず、さっきの光景を思い出すと怖くなって目を瞑

った

足音は僕の前で止まった
でも怖くて目を開けられない
何が怖いのか？と聞かれれば答えられないけれど怖いものは怖い
どれくらい立ったのだろう
最初に声をかけてきたのは正一だった

「あの・・・・同じクラスの　吉田　実　君だたよね？」

恐る恐る目を開けると目の前に正一の顔が見えた
僕の視線に合わせるように方膝を付いている
もっと驚いたのが、いつもは無表情なのに不安そうな顔をしている
まだ怖くてうまく喋る自信がなかった僕は勢いよく頷いた

「あのさー・・・・・さっき見たことみんなに内緒にしてくれないかな？」

僕は最初、言葉の内容が理解できなかった
さっき見たこととは車両が浮いていた事だ
何で黙っている必要があるのか解らなかった
僕が返事しないことに不安になったのか
正一は不安そうな顔になりながら続けて言ってきた

「その・・・・さっき車両が浮いていたでしょ？あれ超能力で浮かせたんだ」

なるほど！
あれが超能力と言うものなんだ
初めて見てビックリしたけど凄いな超能力

「超能力は内緒にしていたいんだ。お母さんやお父さんが知ったら問題になって離婚とかになったらイヤだし・・・・・」
「り・・・離婚！？」
「・・・・うん」

僕は離婚って言葉を聞いて慌ててしまった
だって！僕の家も一年前に離婚して母子家庭になっていたからだ
お父さんはお母さんとは違う人が好きになって出て行った　と後でお母さんが言っていた
僕は大きく深呼吸して正一の顔を見た

「どうして内緒にするのか教えて？後は何でお母さんが離婚しちゃうと思う理由も？」

第四話

吉田　実

お風呂に入りながら僕は話の内容を思い出していた

今の社会では超能力者は差別されている
超能力を持っただけで化物扱いされたりする
その差別が家族にまで及ぶ場合もある
力の強い能力者になれば
その力が恐ろしくなって家族からも差別される場合もある
親は子供に能力があるとわかると　それが原因で捨てたり離婚したりなど
家庭が壊れることが多いらしい

自分で話す内容に怯えている様子で語る正一の姿の方が記憶に残っている

超能力って持ってしまうと大変だな・・・・
普段無表情なのも能力が暴走しないように抑える為なんて僕には耐えられないしな
あの時超能力の事教えてもらうまでは化物でも見るような感じで正一見ていた
明日正一に会ったら謝ろう

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

次の日
皆本　正一

教室に入ると吉田実と視線が合った
昨日のことを思い出すと教室に居辛い気持ちになってくる
内緒にしてくれると約束はしれくれたけど守ってくれるとは限らない
もしバラされたらどうしよう
そんな事を考えると不安になってくる

黒板に置いてある黒板消しがカタカタと鳴る

いけない！感情を抑えないと能力を無意識に使っているようだ
冷静に冷静に・・・・・
超能力が強くなってきているのか
少しでも動揺したら能力が勝手に発動してる・・・
今のところＥＳＰ検査には幸い引っかかっていないけど
時間の問題かも知れない

自分の席にランドセルを置いて教科書を机の引き出しにしまう
ランドセルをロッカーに置きに行こうと持ち上げようとした時に

「おはよう皆本」
「・・・・・・おはよう吉田君」
「あ・・・あのさぁ・・・・・」

吉田は目を泳がし、人差し指で頬をかきながら「昨日はごめんな」
「へ？」

私は予想外の言葉を言われて対応できなくなっていた
なんでいきなり謝ってきたのか理解できなかった

「その・・・化物でも見たような目で見ちゃったしさぁ・・・・」

「あぁ・・・・気にしてないよ・・・・多分それが普通の反応だと思うし」

吉田はなぜか悲しい顔をして僕を見てくる
何か気に障るような事を言ったのだろうか？

「お詫びの印に今日学校が終わって暇だったら僕の家で遊ばない？新作のゲームがあるんだ」
「え？ゲーム？」
「うん！ドムクエだよ！！」

あぁ～ドムクエねぇ・・・・・
てか、一文字違えば著作権侵害で訴えられないと思ってるのか・・・コメリカとか・・・一文字変えればいいものなのかな？この世界は・・・・
どっちにしろ、某ゲームでも余り興味ないんだけど
今も『昔の私』もゲームには余り興味出無いんだよね
だけど、断ったら泣くよね。この顔してる人は・・・・

「ドムクエか！凄いね！遊びに行ってもいいの？」
「うん！一緒に遊ぼう！！」

僕は心にも思ってない事を言って放課後、吉田の家に遊びに行く約束をした

第四話（後書き）

書き方が雑になってきた気がする

第五話

皆本　正一

今僕の目の前には腐海が広がっている

「なに？この腐海は？」

「え？ちょっと散らかってるだけだよ！！腐海じゃないよ！！」

僕の横で何やら必死に抵抗している吉田が居る

抵抗していてもこの腐海が無くなる訳ではない

よく見れば吉田の服も綺麗に洗濯されている様子もない

育児放棄か？酷い親もいるものだ

吉田は諦めたような顔をして事情を説明しだした

「お母さんと二人暮らしで、お母さん仕事が忙しくて帰りが遅いんだ。土日も仕事で家に居ないんだ」

ふむ、育児放棄している訳ではなくて家事に手が回らないのか・・・・・・

よくある最悪のパターンに行くケースの家庭環境のような・・・

「掃除だけでも手伝ってあげたら？吉田君にもできると思うけど？」

「僕、学校でしか掃除したことないから、やり方わからないよ」

うぅぅ・・・・何？このダメッぷりの返事は！！

子供は親を選べないけど

今ある環境を自分で開拓する気持ちにならないのか

ダメだ！目の前の腐海とさっきの返事でもう耐えられない！

「吉田君！箒と雑巾どこにある！後ゴミ袋も！！！」

「え？ゲームしないの！？」

私は玄関の近くに置いてある回覧板を持ち、それで吉田の頭を叩いた

「っ～～～～～～！！！」

「馬鹿もん！！自分の家が散らかっていたら少しは気にしろ！！」

吉田は一瞬怒った顔をしたが私の顔を見ると頬を引きつらせながら

家の中から掃除道具を持ってきた

私は道具を引っ手繰ると

「ほら！お前もゴミ袋持つ！」

「箒の使い方も知らんのか！！！」

「こういう場所は雑巾で拭くの！面倒くさそうに箒で掃くな！！」

ふと気づけば吉田は私の顔を恐る恐る見ながら一緒に掃除をしている

いけない『昔の私』の時の悪い癖が出てしまったようだ

『昔の私』は仕事の出来ない新人を見ると我を忘れて教育をしてい

た時があった

後日、教育指導を受けた新人達は影で私のことを　修羅のお局様

と呼ぶようになっていた

一緒に掃除をする吉田の顔を見ると所々赤くなっている箇所がある

どこかにぶつけたのだろうか？

そう言えば『昔の私』が我を忘れて新人達を教育した後、同じように所々顔を赤くしていたな・・・
深く考えないようにしよう

ちょっと小腹が空いてきたな
そう言えば吉田の母は仕事で帰りが遅いとか言っていたな
晩御飯とかどうしてるんだろう？

「吉田君はご飯とかどうしてるの？」
「え？ご飯はお母さんの帰りが遅いときは、そこのテーブルにお金が置いてあるから
それを使ってカップ麺やコンビニのお弁当で済ましてるよ」

話を聞いて私は硬直してしまった
横では吉田が心配そうに見てくる

ダメじゃん！！かなりヤバイよ！！何！？この昼ドラとかに出てきそうな家庭は！！
これは吉田に家事を教えないと将来が心配になってきた

私は決意して吉田の目を見て言った

「今日は僕がご飯作ってあげるよ。ただし明日からは吉田君に料理と掃除と洗濯後、勉強も教えてあげる」
「えーーー！！！」

吉田はイヤそうな顔をしながら抗議の声を上げてる

「何か文句ある？」
「いえ・・・・なにもないです」

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

現在

吉田　実

今僕の横では正一が教科書を丸めて片手で持っている
この問題集がうまくできなかったら
その教科書で頭を叩かれるか思うと問題を解くスピードが上がっている

最初に正一が我が家に来たことを思い出すと今ではいい思い出だ
今では家の中は綺麗になって美味しいご飯も正一が居なくても数種類自分で作れるようになった
お母さんからは「実ちゃんがこんなに手伝ってくれるなんて助かるわ」と喜ばれて僕も嬉しくなってしまう

学校は勉強に遅れていて授業を受けていても何を教えているのか理解できていなかったけれど
今では先生の言ってる事が解って毎日学校に行くのが楽しくてたまらない

たった三ヶ月
この時間だけで僕の生活はとても良い方に大分変わった

横では怖い顔している正一
超能力は僕と正一の二人だけの秘密だ
僕と二人で居るときは超能力の事を知ってるからと無理に抑えなくていいのか表情が豊だ

何だかんだで正一とは家の外でも一緒に行動する事が多くなったと思う
正一は僕にとってはちょっと怖い救世主だ

バシ

「いてぇっ～～～～～」
「ほら！考え事しないでさっさと答えを解く」
「わかってるから殴るなよ～～」
「うるさい！」

バシ

「っ～～～～～～！！！」

第六話

皆本　正一

私は今の生活が凄く幸せに感じて、これからも続くものだと思っていました
そう・・・・私は原作を読んで知っていたのに
アイツがそろそろ我が家にやってくる時期が近いとなぜ覚えていなかったのでしょうか？
アイツは・・・・前触れもなく突然我が家にやってきた
そして私の大切なものを侵略していったのです

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

あれから数ヶ月たち、私は九歳になりました

吉田君は『昔の私』の経験を元に家事等を教えて
今では最低限の家事は一人で出来るようになり
学校の勉強にも学力が追いついてきて
今では放課後、教室で一緒に学習するだけで足りるようになりました

今日も放課後一緒に学習をして、その後は一緒に遊び家に帰ってきました

いつも通りの時間に玄関を開けて家に入ります

「ただいま」

いつも通りだとリビングの方からお母さん達が「おかえりなさい」

て返事がくるのに今日は何の反応もありません
逆にリビングの方から楽しげなお母さん達の声が聞こえてきます
私は　どうしたんだろう？　と不思議に思いながら玄関からリビングに向けて歩き出しました
リビングに通じるドアに手を掛け開けた先にアイツは居ました

犬種　ミニチュアダックスフンド　生後数ヶ月　名前トルテ

アイツはリビングの真ん中に陣取ってお兄ちゃんとお母さんを独り占めにしていました
その後どうやってその日を過ごしたのか記憶がありません

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

お父さん

「やれやれ、やっと静かになったか」

私はリビングでソファーに座り一騒動が終わったと安堵している
横では妻が私に一息つくためにお茶をだしてくれる

「おつかれさまでした。お父さん」
「いや～参ったよ・・・家に入ったらいきなり正一 に抱きつかれたと思ったら泣いてるからな」

横では妻やおばあちゃんが人事のように笑っている

まったく人事だと思っているようだが担当になったものとしては苦労させられたものだ

今日はたまたま仕事が定時に終わり、いつもより早めに帰宅が出来た家に入るなり、突然正一に抱きつかれて顔を見たら泣いているものだから
珍しく光一と喧嘩でもしたのかと思いながら
足にしがみ付く正一を引きずるようにリビングに向かうと子犬が居た
妻達に聞けば正一は子犬に妻達を取られたとかで子犬に嫉妬して泣いたという
おかげで早く帰れたのに正一が寝るまで慰めたり諭したりの一騒動だ
結局最後まで子犬に嫉妬して光一と同じベットで一匹と二人は寝ている

「まさか犬一匹であんなになるとはな・・・・・」
「えぇ・・・私も正ちゃんがあんなに取り乱すとは思いませんでしたわ」

また思い出したのだろう妻の顔から笑みがこぼれる

「どうするんだ・・・あんなのが連日続いたら俺がもたないぞ？」
「大丈夫ですよお父さん。最初だけですから」
「本当に大丈夫か？」
「一ヶ月もすれば逆に光ちゃんと正ちゃんで犬の取り合いになりますよ」
「おいおい・・・・それのどこが大丈夫なんだよ」
「次回も頑張ってくださいね。お父さん」

第七話

吉田　実

僕達は県境の山地一帯にある国定公園に来ている
滅多に人がやって来ない森の中だ
ここなら人目を気にしないで能力を使って正一と遊べる
帰りは正一が瞬間移動能力を使い一瞬で僕の家まで帰るのが定番だ

今僕の横では不機嫌な顔をしている正一が居る

「正一、いい加減に機嫌直せよ」
「お前に何がわかるんだよ！！」
「どうして犬を飼うことになっただけでそんなに怒るんだよ～」
「お兄ちゃんを取られた気持ちなんかお前にわかるもんか！！」

あぁ・・・ダメだ
これは何を言っても耳に入らないな

僕は黙って静観することにした
正一はまだ一人でブツブツと何やら呪詛めいた感じで呟いている
側から見ると　ちょっと危ない人って感じだ

僕と出会う前の正一だったら
この様な状態になれば能力を制御できずに暴走していたかも知れない
だから感情を押さえ込み能力を制御していた

今では僕の前限定だけど
能力を使い感情を表に出すようになり

ちょっとでも暴走をしたら押さえ込むの繰り返しをしている
何度も繰り返しているうちに能力が暴走する限界がわかってきたのか？
ある程度喜怒哀楽を出しても能力が勝手に発動することはなくなってきている

まぁ・・・能力の制御ができるようになっても普段無表情なのには変わりないけど

正一はマザコンだったのか・・・いやブラコンか？
家族に関わる事になると正一は我を忘れることが多いなぁ・・・

僕がふと思いふけていると
僕達を中心に周りの木がメキメキと音を起てて倒れていく
空からはどこからともなくオタマジャクシが降ってくる

「正一！！能力抑えろ！！暴走してるぞ！！」

目の前に倒れた木が粉砕する

「落ち着け！！僕を殺す気か！！！」

僕は出せるだけの大きい声で横に居る正一に呼びかけた

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

自宅　お母さん

初めて会ったのはＰＴＡの会議の時だっただろうか？
その時は離婚して間もない時期だったらしく
顔がやつれ　疲れた印象の人だった

その吉田君のお母さんが今私の前で座っている

「突然の訪問してすみません」
「気にしないでください吉田さん。いつも正一がお世話になってます」
「いえ！こちらこそ、実がお世話になってます」

正一が何か迷惑でもかけたのかしら？

私は吉田さんを見た

「家の正一が実君に何かご迷惑でもおかけしましたでしょうか？」
「そんなことはありません。正一君はとても優しい子ですよ」

正一が迷惑をかけてないのであればなんの用事で来たんだろう？

「むしろ正一君に私達が助けられたと言ったほうが早いかも知れません」
「助けた、ですか・・・・・？」
「はい・・・じつは・・・・」

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

「まぁ・・・家の正一がそんな事を？」
「はい。なんとお礼を言えば良いのか・・・・」

私は吉田さんの話を聞いて驚いてしまった

吉田さんは離婚をして仕事と家事で体力も精神も追い込まれていた
本人もそろそろ限界だと思い始めていたとき
帰ると今まで掃除が出来ずに散らかっていた家が綺麗になり
暖かい料理ができていた
最初は世話好きのお隣さんが同情してやってくれたのかと思ったの
だが
それが毎日続き、おまけに息子の実も毎日家事を手伝うようになった
誰が家事を実に教えてやったのかと問いただしても
全部自分で調べてやったの一点張り
そんな状態が三ヶ月続き
今度は実がテストで良い点を取るようになった
一度だけじゃなく何度もだ
厳しく何度か問いただし
やっと最近になって正一に教えてもらっていると白状した

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

皆本　正一

気づけば僕達の周囲１０メートルが見事なクレーターになっていた

「ご・・ごめん実」
「マジで死ぬかと思った」

横を見ると腰を抜かして尻を地面に着けてしゃがみ込んでいる実がいる
「へへへ」と横から乾笑が聞こえる

またやっちゃたよ～
しかも今回は盛大にクレーターまでできてるし
自分では少しだけ能力が勝手に発動した感じだったけど
また超能力が強くなってる気がする
こんなに強力になっても次のＥＳＰ検査に引っかからないよな・・・

私が自分の超能力で不安になっていると横に居る実は神妙な顔をしながら言ってきた

「なぁ・・・正一？」
「なに？」
「また超能力強くなってないか？」
「うぐ！」

実は軽くため息をつき言ってきた

「僕は正一の超能力は気にしないよ、けどさぁ・・・・・」
「けど？なんだよ？」
「次のＥＳＰ検査で・・・・もしも引っかかったら大人の人に超能力の事話さないか？」

第七話（後書き）

中途半端？

第八話

皆本　正一

「次のＥＳＰ検査で・・・・もしも引っかかったら大人の人に超能力の事話さないか？」

私は、その言葉を聞いて驚いた顔をして実を見ました
いつも冗談を言ってる顔ではなく真剣な眼差しで私を見ています

「な・・・どうしたんだよ急に？」
「僕達だけでは扱いきれないかも知れないと思ったんだよ」

私と実は辺り一面残骸と化した木やクレーターを見ます

確かに、実の言うとおりかも知れない
成長すると共に超能力も成長を続け、このままいけば大変なことを起こすかも知れない
私にとって少し能力を出した感じでこのありさまだ
これが家の中だと思うとゾッとする

「正一のお母さん、良い人だしさぁ？超能力者だと解っても差別したりしないよ」

それは私も知っているよ実君
原作での１０年後のお母さんやお兄ちゃんは超能力に対して差別の意識も無く寛容だったよ
でも、今は１０年前だ。そう１０年も前なのだ！！
人間生きていて１０年も同じ性格であり続けるなんて有り得ない

超能力者は普通人から見れば化物だ
私は怖いのだ・・・臆病なのだ・・・
お兄ちゃん達から化物と呼ばれるのを・・・・
化物だと言う目で見られるのが・・・

吉田　実

言わなければいけないことだと思い正一に言ったけど
僕は・・・・自分が正一に言ったことに対して後悔していた
初めて超能力について話していたときも正一は怯えていた
今僕の目の前で正一は怯えている超能力が無い僕にはわからないことだけど
正一は自分の超能力に怯えている
超能力を話した後のことを想像して怯えている

僕は正一の頬っペタを両手で思いっきり引っ張った

「a@fm%m¥＊！！！！！」
「なに辛気臭い顔してるんだよ！！僕は《検査にもしも引っかかったら》って言っただろう」

この重い空気にしてしまった雰囲気を無理やり明るくするように悪戯っぽい顔で言います

「もしかしたら一生検査に引っかからないかも知れないだろう？念のために心の準備をしとけって意味で言ってみただけだよ！」

正一は引っ張った頬が痛いのか？両手で頬を包みながら
「それなら、そうと言えば言いのに・・・」ブツブツ言っている

僕に向かって物が飛んでこないので
まだ正一はいつもの調子に戻ってないが大丈夫だろう・・・
何かあれば普通人の僕だって正一の助けになれるはずだ

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

皆本正一

あの後私達はＥＳＰ検査等の話を避けながら学校の事や腹は立ちますが子犬の事などを話をして帰宅しました

今私はいつも通りの時間に玄関に入り「ただいま～」と言います

リビングの方からお母さんがやってきます
いつもより機嫌が良いみたいです

私は何か良いことが有ったのか？と思い首を傾げながら
お母さんの方へ歩きながら、もう一度「ただいま」と言います
側まで来るとお母さんが　ギュッ　と私のことを強く抱きしめます

「も～正ちゃん！お母さん嬉しくなったわ！！」
「へ？」
「なんでもっと早く教えてくれなかったの？」
「はぁ？」
「それにしても、正ちゃんどこで料理や掃除を覚えたの？お母さんビックリしたわ」
「？？？？？？」

私と実が遊んでる間に実のお母さんが来たことをお母さんは説明してくれました

その間もお母さんに抱きしめられて、誉められて嬉しいのやら恥ずかしいのやら

リビングに到着してお兄ちゃんがトルテを構っていても短時間なら気にしません

えぇ・・・《短時間》なら気にしないよ？《短時間》だよ？

気がつけばお兄ちゃんとトルテの間に割って入ってます

「そこは僕の場所だからトルテはそこに居ちゃダメーーーーー！！！」

叫びながら私は泣くことにしました

「いい加減にしなさい正ちゃん！」とさっきまで誉めていたお母さんが言います

お兄ちゃんは困った様子でアタフタしています

私は今日も早く帰宅してくるお父さんがドアに手を掛けて玄関に入るのを超能力で気づいているので

玄関に入ったら、今日もまたお父さんに抱きついて盛大に泣こうと思います

親に甘えられる時期なんてすぐに去ってしまうから今のうちに思いっきり甘えたいと思います

だって私はこの世界では九歳なんですよ

まだもう少し普通人の子供のままで居ても良いですよね？

第九話

皆本　正一

帰り道に同級生の子達に遊びに誘われ
私達は農家をしている子の畑で落とし穴を作っています

なんで？落とし穴を作っているのか？と聞かれれば
今学校の男の子達の間では落とし穴を作って遊ぶのが流行してるようなのです
・・・・と、吉田　実　が教えてくれました

私の視線の先では実を含めて同級生の子達八人が穴を掘り終えたのか？
今度は上に何を載せるか話し合いをしています

「おい！落とし穴の上にダンボール載せてわからないようにしようぜ！！」
「「「おーーー！！それは凄いアイディアだね！！！」」」
「いやいや！！この木の枝とかを載せたほうがもっと解りにくいと思うよ！！！」
「「「すげーーー本当に穴があるとは思えないくらいだ！！」」」

子供って不思議な生き物だな・・・・・・・
人様の畑で落とし穴を作ったとしても落ちるのは畑の所有者だけなんじゃないの？

私が些細な考え事をしている間に話は進んでいたようで？

いつの間にか落とし穴の上を飛び越えて
どの幅の穴までなら飛び越えられるか？の遊びに変わっていってい
ました

先頭を切って実が落とし穴の上を飛び越えたのを切っ掛けに
次々と男の子達は飛び越えていきます
もちろん私も参加しています

全員飛び越えては穴の幅を広げていくのを何度も繰り返します
意外とこの遊びは単純だけどやっていると夢中になるものですね
でも、幅が広がっていけば運動神経の低い子が最初に落ちるのが普
通ですよね
皆も薄々解っていたと思うんですが？

やっぱり落ちたのは運動神経の低い子の　金指一郎　君でした

「うわぁぁぁ～～～～」

ドスン

穴に落ちる重い音と金指の声でみんなが一斉に穴の周りに集まります

「お～い！金指大丈夫か？」

横に居る男の子が穴の中の金指に声をかけると
穴の中で微かに身動きを取ろうとする金指の姿が見えます
動いたと思った瞬間に穴の中から「うあぁ～～～～～ん」と泣き声
が聞こえ

私はすぐに穴の中に降り金指の様子を見ようと手を頭に乗せます
私の隣では同じように実も降りてきていたみたいで
実が上にいる男の子達に向かって叫びます

「やばい金指の頭から血が出てるよ！！誰か近くに居る大人を呼んで来いよ！！！」

実の声に誰かが反応したのか？
一人の男の子が穴から離れて近くにいる大人を探しに行くのを感じられます

私は実の言葉が気になり普段は使わないように抑えている接触感応能力を使い金指の頭を重点に見ます

金指は坊主なので見た目は頭の出血が目立ちますが
落とし穴の蓋で使った木の枝などで軽い擦り傷になって血が出ているだけのようです

頭より重傷だったのは足首の捻挫ですね
靭帯を少し傷つけているので、それが痛いのと落ちてパニックになって泣いているんでしょう

酷い怪我ではないですが・・・
靭帯の傷は後々の治療の経過で怖いものに発展する場合があるので
例えば運動障害や関節の軸変形は怖いものです

普段は自分の生命維持で無意識に使っている生命制御能力を使い
捻挫を軽度の傷にまでさりげなく治療しますか・・・

金指や上に居る男の子達は、まだパニックているので気づかれない

でしょう

第九話（後書き）

子供って不思議な生き物です

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9010z/

絶対可憐チルドレン転生物　　練習作

2012年1月11日06時50分発行